# 過去に受けた学校性教育の内容と継続へのニード - 高校生対象のアンケート調査から-

仁木 雪子 山野内靖子 今 禎行 小池久美子

目 次

- 1. はじめに
- 2. 研究目的
- 3. 研究方法
- 4. 結果
- 5. 考察
- 6. おわりに
- 7. 文献

#### 1. はじめに

6年ごとに実施される日本性教育協会による第6回青少年の性行動全国調査報告(2005年)では、青少年の性行動や性意識の他に性教育の実施状況なども調査・報告されている。1999年からの6年間の間に性教育の学習内容は、二次性徴をはじめとする身体的・生理的側面のみならず、性行為や避妊の方法、性の内容や相談のしかたなどの踏み込んだ内容を取り扱うようになったと報告されている1)。性交経験率は、高校男子で26.6%、高校女子で30.0%であるのに対し、大学男子では61.3%、大学女子で61.1%と約6割の学生が性交を経験している2)。このことから性行動が急激に活発になる大学生のために、高校での性教育はもちろん、大学生においても性に関する指導は必要ではないかと考える。今回、高校生の男女別性教育を構築するために性に関する指導は必要ではないかと考える。今回、高校生の男女別性教育を構築するために性に関する調査を行う機会を得、その中で、過去に受けた性教育で教わった事柄と役に立つと感じたかどうか、卒業後も性に関する指導を希望するかの意識調査を行った。その結果、ほとんどの生徒は性に関する内容の授業を受けており、約6割の生徒が役に立ったと感じていた。卒業後の教育や指導については約4割の生徒が「必要」と答えており、これまでの性教育が役に立つと感じている生徒に卒業後も「必要」と答えた生徒が多かった。これらの結果から、高校生から卒業後に至る学校性教育や性に関する指導について考察する。

#### 2. 研究月的

高校生が過去に受けた学校性教育の内容と継続の必要性について把握し、今後の課題について 検討する。

# 3. 研究方法

調査対象は秋田県立B工業高等学校1~3年生455名(男子429名、女子26名)、調査期間は平成21年10月~11月、調査は自記式質問紙法によるアンケート調査である。アンケー調査内容を学校長に示し承諾を得、学校における講義時間を利用して、各クラス担任より調査目的、倫理的配慮を説明していただき、調査票を配布、記入後回収する集合調査法をとった。

倫理的配慮としては、調査の実施に際し八戸大学・短期大学研究倫理委員会の審査を受けた。 アンケートは無記名で、回答後は各自の封筒に入れその場で自ら封をして回収する。回収した質 間紙は機械的に連番を打ってコンピューターにより集計・解析処理をするため、匿名性は保持さ れる。結果は研究の目的以外に利用せず、公表も集団データとして公表する。回答は自由意志で ある。回答したくない項目には回答しなくてもよい。以上のことを記した文章をアンケートの表 紙に添付し配布した。

集計・分析は、エスミ「Excelアンケート太閣Ver.3.0」を使用し、単純集計し、項目によってはクロス集計、 $\chi^2$ 検定を行った。尚、工業高等学校のため男女差の人数の差が大きかったため男女の比較・分析はしなかった。

## 4. 結果

アンケートは455部配布し、431部回収(回収率94.7%)、有効回答402部(有効回答率93.3%)であった。402部中、男子は380名、女子は22名であった。

- 1) これまでに学校性教育を受けたことがあるか。
- 学校において性に関する内容の授業を受けたことがある生徒は、397名(94.3%)で男子360名、女子19名であった。
- 2) 性教育で教わった事項は役に立ったか。

「非常に役に立つと感じた」が52名(13.7%)、「役に立つと感じた」が195名(51.4%)、「役に立たないと感じた」が25名(6.6%)、「どちらともいえない」が103名(27.2%)、NAが27名であった。

3) 性教育で教わった内容(複数回答)

これまでの性教育で学んだ事柄は多い順に、「エイズ」346 (91.3%)、「性感染症の知識」305 (80.5%)、「性器のつくりと働き」が299 (78.9%)、「生命誕生(受精・妊娠・出産など)」が296 名 (78.1%)、「精通(射精)」が268名 (70.7%)、「避妊の方法」が265名 (69.9%)、「初経(月経)」が263名 (69.4%)、「二次性徴(発毛・声変わり・乳房の発育など)」が251名 (66.2%)、「思春期の心理」が231名 (60.9%)、「セックス (性交)」が227名 (59.9%)、「男女の心理と行動の違い」が176名 (46.4%)、「性欲の処理の仕方」が151名 (39.8%)、「異性との交際の仕方」が146名 (38.5%)、「男性と女性の役割」が141名 (37.2%)、「性に関する相談場所」が133名 (35.1%)、「性の人生における意味」が86名 (22.7%)、「愛とは何か」が81名 (21.4%)、その他3名、NA2名であった (表1)。

4) 卒業後も性に関する教育や指導があったほうがよいか。

高校卒業後においても性に関する教育や指導があったほうが良いかに対して、「はい」が166名 (41.3%)、「いいえ」が234名 (58.2%)、NA 2 名であった。

表1. 性教育で教わった内容(複数回答)

n = 402

_ 我一 正教育 (教行) 7元 1 各 (後数邑百)		11-402
性教育で教わった内容	人数	%
エイズ	346	91.3
性感染症の知識	305	80.5
性器のつくりと働き	299	78.9
生命誕生(受精・妊娠・出産など)	296	78.1
精通(射精)	268	70.7
避妊の方法	265	69.9
初経(月経)	263	69.4
二次性徴(発毛・声変わり・乳房の発育など)	251	66.2
思春期の心理	231	60.9
セックス(性交)	227	59.9
男女の心理と行動の違い	176	46.4
性欲の処理の仕方	151	39.8
異性との交際の仕方	146	38.5
男性と女性の役割	141	37.2
性に関する相談場所	133	35.1
性の人生における意味	86	22.7
愛とは何か	81	21.4

#### 5) 4) で「はい」と答えた理由

「高校生までの性教育では不十分だから」が38名(22.9%)、「高校を卒業してからのほうが性行動が活発になるから」35名(21.1%)、「信頼できる正確な知識を身につけたいから」63名(38.0%)、「学校以外では性に関する教育や指導が整っていないから」10名(6.0%)、「学校以外では性に関する教育や指導が受けにくいから」9名(5.4%)、その他4名、NA7名であった(表2)。

#### 6) 4) で「いいえ」と答えた理由

「個人で学び実践していく年代だから」76名(32.5%)、「大学生にもなれば必要性に差が出てくるから」45名(19.2%)、「高校生までの知識で十分だから」97名(41.5%)、その他11名、NA 6 名であった(表 3 )。

7) 2) と4) の関連(「これまでの性教育が役に立つと感じた」と「卒業後も性教育が必要」) 高校卒業後も性に関する教育や指導が「あったほうが良い」と答えた生徒166名の中で、これま での性教育が「非常に役に立つと感じた」は34名(205%)、「役に立つと感じた」は93名(56.0%)、 「役に立たないと感じた」は5名(3.0%)、「どちらともいえない」は26名(15.7%)であった。 また、「なくてもよい」と答えた234名の中で、これまでの性教育が「非常に役に立つと感じた」 は18名(7.7%)、「役に立つと感じた」は100名(42.7%)、「役に立たないと感じた」は20名(8.5%)、 「どちらともいえない」が77名であった。卒業後の性教育が「必要」と考えている生徒の中で、 これまでの性教育が「非常に役に立つと感じている」生徒はそうでない生徒より多く(P<0.01)、 「役に立つと感じている」生徒もそうでない生徒より多かった(P<0.05)。

表 2.卒業後も性に関する教育や指導があったほうがよいか

n = 166

「はい」の理由	人数	%
高校生までの性教育では不十分だから	38	22.9
高校を卒業してからの方が性行動が活発になるから	35	21.1
信頼できる正確な知識を身につけたいから	63	38.0
学校以外では性に関する教育や指導が整っていない	10	6.0
学校以外では性に関する教育や指導をうけにくい	9	5.4

表3. 卒業後も性に関する教育や指導があったほうがよいか

n = 234

「いいえ」の理由	人 数	%
個人で学び実践していく年代だから	76	32.5
大学生にもなれば必要性に差が出てくるから	45	19.2
高校生までの知識で十分だから	97	41.5

## 5. 考察

学校教育は教育課程に基づいて展開される学習指導を中心とした授業と学校生活全体を通して行われる生徒指導の両面があり、学習指導要領に基づき教育課程を編成し教育活動を実施する。学習指導要領には教科・道徳として、「性に関する事項」は示されているが、「性教育」については記述されていない。よって性教育の内容・方法は明確でないため、指導に曖昧さが起こることもある。また、教師は「性教育」については教員採用後に自主的に研修を受けるなどして、自己学習により学んでいる③。性情報の氾濫に伴い青少年の性行動・性意識は、低年齢化およし多様化している中で、学校における性教育は充実してきているといえるが、上記の理由でかなり学校差があることが考えられる。

今回の調査は、高校生がこれまで受けた性に関する授業の内容を本人の認識に基づいて調査しているため、実際の性教育実施状況と一致していないことを念頭に置きながら考察をする。

これまでに性に関する内容の授業を受けたことがある生徒は94.3%であることから、ほとんどの生徒が受けたと認識している。秋田県においては平成12年度から18年度まで県の事業として317校で性教育講座が開催されており、学校の授業以外にも外部講師による性教育講座から学ぶ機会も多かったと考えられる。

性に関する内容の授業が「非常に役に立つと感じた」「役に立つと感じた」を合わせると、65.1%の生徒にとって有効なものであったことがわかる。第6回青少年の性行動全国調査報告によると、高校生の場合、「非常に役に立つ」「役に立つ」を合わせると53.2%であるため、それをかなり上回っている4。

# 過去に受けた学校性教育の内容と継続へのニード - 高校生対象のアンケート調査から-

性教育で教わった内容で最も多かったのは、「性感染症(エイズ含む)」で、これは岡部らの報 告5)と一致する。性感染症の増加は若者に特に顕著であることや、先進国の中で日本は唯一HIV 陽性者・エイズ罹患者が増えていることなどは社会問題になっている。性交経験率が上昇してい る現在、性交開始年齢を上げることも大事であるが、性交経験者あるいは性交経験の可能性が高 くなる年代に対しては、自他の健康を守る知識を身に付けさせることが急務となっている現状が うかがわれる。また、「二次性徴」をはじめとする生理的内容のものや性交を含めた「生命誕生・ 避妊」に関するものが5割を超える既習率であったことは全国調査とほぼ同じ結果であった。ま た、「男女の心理と行動の違い」や「男性と女性の役割」、「性の人生における意味」、「愛とは何 か」などは、性の心理・社会的側面であり、生理的側面だけではなく広く性について学んでいる ことが分かる。平成11年に文部科学省から出された「学校における性教育の考え方・進め方」6 によると、学校における性教育の目標は、「人間の性を人格の基本的な部分としてとらえ、生理的 側面、心理的側面、社会的側面など総合的に科学的知識を与えるとともに、児童生徒が生命尊重、 男女平等の精神に基づく適切な異性観を持つことによって、自ら考え、判断し意志決定の能力を 身に付け、望ましい行動をとれるようにすることである。|とあり、基本的な指導書となっている。 青少年の性行動全国調査の1999年と2005年の調査結果を比較してみると、性教育に関する内容の 既習率が上昇しており、特に心理·社会的側面の内容については 2 倍以上の既習率になっている。 これらのことから、性教育は広い範囲の内容が普及されてきていることがわかる。

高校卒業後も性に関する教育や指導を求めている生徒は、5割以下であり、高校の時点で既習内容が役に立ったと感じている生徒に多いことがわかった。性交経験率は、高校男子で26.6%、高校女子で30.0%であるのに対し、大学男子では61.3%、大学女子で61.1%と約6割の学生が性交を経験している<sup>2)</sup>。このことから性行動が急激に活発になる大学生は、これまで学んだことを実践に移していかなければならない。自己学習が身に付いている学生であれば、復習あるいは数多くの情報の中から正しい情報を選び参考にしていくであろうが、そういったプロセスを踏むことが困難な学生も多いのではないだろうか。

今回の結果から、高校時代に役に立つと感じている性教育を経験している生徒は、大学においても性に関する教育や指導を希望していることがわかった。岡部らの報告5)では、大学生が高校時代にもっと聞きたかったこととして、「性感染症」「妊娠」「異性の心理と異性との付き合い方」「人間としての生き方」が多かった。高校時代に既習した内容であったとしても、自分が置かれている立場が変化すればおのずとニードも変わってくるといえる。今後は、対象のニードを把握しながら、性に関する指導や教育の内容・方法・時期などを検討していく必要があると考える。

#### 6. おわりに

学校における性教育は、学習指導要領に基づいて展開されているが、生徒の性意識・性行動は個人差が大きく集団指導には限界があり個別的対応が必須である。また、教員が主担当者ではあるが、地域に存在する専門家を巻き込みながら生徒に役に立つ内容を工夫していくことが求められている。さらに、性に関する教育や指導においては家庭や地域が果たす役割が大きい。

今回の調査で半数以下ではあったが、高校卒業後も性に関する教育や指導を求めている生徒がいることがわかり、短大の教員として果たすべき役割を検討しなければならないと考える。実態調査から始まり、専門領域を活かしながら学生のニードに応えられる体制を構築していきたい。

# 7. 文献

- 1) 財団法人日本性教育協会編:「若者の性」白書 第6回青少年の性行動全国調査報告、小学館、2007、151.
- 2) 前掲載1)、13.
- 3) 堀内比佐子: 学校における性教育の現状と課題、周産期医学、2007-8、37(8)、998.
- 4) 前掲載1)、153.
- 5) 岡部惠子他:大学生の認識をもとにした高等学校における性教育の現状と課題 (第1報)、母性衛生、2009,50(2)、343-350.
- 6) 文部省:学校における性教育の考え方・進め方、1999、9.